

なのしはな通信

No.28 2018.2



沖縄研修旅行 中山きくさんと

「ただ淡々と業務をこなす機械のような人間ではなく、目の前にいる患者さんを観察し、言葉や言葉以外からも願いを掴む大切さを受け持ち患者さんが命をかけて教えてくれた。ひとりの人間として誠実に向き合い、患者さんの頑張りや人間の生きる力を全力で応援できるようになりたい。」「自信の持てない3年間だったが、最後の実習で受け持たせていただいた患者さんに出会えて、患者さんのそばで、患者さんの声を聞き、共に歩み続ける看護師になりたいと思った」卒論発表で述べられた3年生のレポートの一部です。

学生は、学校での学びと臨地実習で、必死に生き抜こうとする人間の力強さ、人間の回復力のすばらしさを実感し、社会や平和と人権そして医療者の役割にもしっかり目を向け、人としての成長も遂げています。

三年間の学びの集大成であるこの機会は学生の大きな成長を実感する時でもあります。こういった学生の学びを支えているのは、民主的で経験豊かな多くの教育実践者の方々の惜しみない応援や民医連の事業所が地域住民の皆さんと共に歩んだ医療活動の歴史と実践が学生たちに豊かなフィールドとして提供され、教育力として学生の成長に大きな役割を果たしているからであることを改めて痛感します。まさに本校の財産です。心から感謝申し上げます。

学校の裏手の土手一面に咲く菜の花に励まされた日を思いながら、これからも学生と共に歩み続けたいと思います。



校長 窪倉 みさ江

学校行事

第23回 東葛祭

9月29日・30日に東葛祭を行いました。今回は、『未来をつくる小さな芽～平和な社会を築くために私たちにできること～』を東葛祭のテーマに行いました。

私たちの学校では患者さんの立場に立つ看護師となれるよう、医療・看護の専門知識・技術はもちろん患者さんを取り巻く社会保障・情勢・雇用などについて学んでいます。そんな私たちをこれからの社会をつくる小さな芽と表現しました。平和な社会を築くためには何ができるのかを考えていきたいと思いこのテーマにしました。また、地域の方々と一緒に暮らすやすい地域づくりをしていきたいという願いも込めています。

東葛祭1日目は学びの発表を行いました。各学年が学んだことを発表し、全校で学びの共有を行いました。1年生は消化器官の流れを電車で例えてわかりやすく劇にして発表を行いました。2年生は生命活動で学んだ骨筋について1日の生活の中でどのように関係しているのかを劇を交えながら

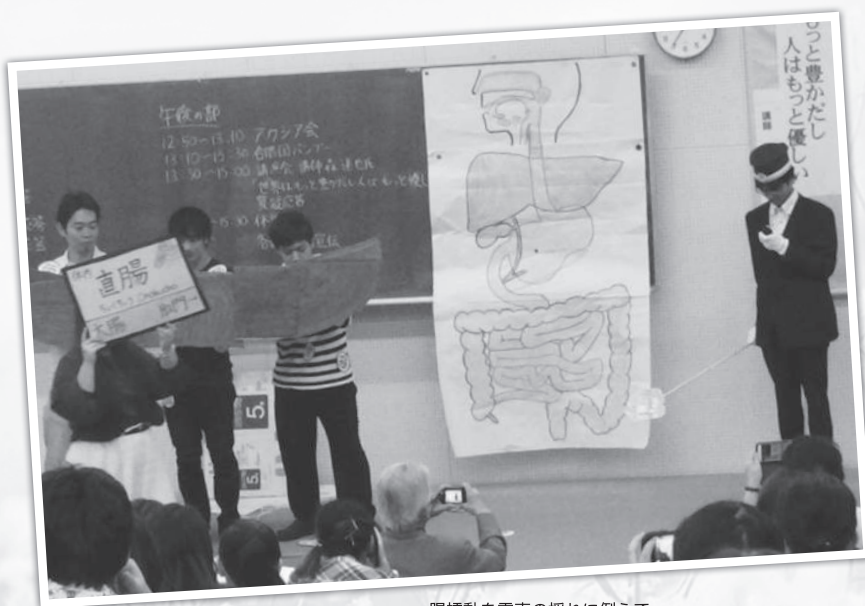
発表を行いました。3年生は地域フィールドでの学びを「雇用」・「農業」を中心に自分たちが体験した様子などを交え、発表を行いました。

午後は、映画監督で作家の森達也さんを講師に迎え「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」というテーマで講演していただきました。現在の日本の犯罪率についてノルウェーと比較してお話ししていただきました。ノルウェーでは再犯率が少なく、釈放の条件として、帰る家と仕事を国が保障することにより、社会復帰ができることと知りました。日本も人口比率にするとノルウェーと犯罪率は変わらないそうです。事件が起こるとこぞって報道するメディアや防犯カメラの多さ、いかにも犯罪が多いような認識になってしまっていることを感じました。羊とヤギの話の中で羊は周りに合わせることにしないけどヤギは自分から動くことができます。全員がヤギとなって動く必要はないが、少しでも疑問に思ったら立ち止まり声を

出すことがこれからの社会を変えるきっかけとなるだろうと話して下さいました。

2日目は学生が中心となり夏休み前から準備してきた食事処、フリーマーケット、子ども縁日、お化け屋敷、リラクゼーション、野田一民氏絵画展、小林功氏写真展、レモンカンパニーとの共同出店の平和ゼミナールによるカフェと活動報告を行いました。学生たち自身も楽しむことができ、たくさんの地域の方々にお越しいただきました。フリーマーケットでは事前に地域の方々にチラシを配り、たくさんの食器やおもちゃを寄付していただきました。当日も多くの方に足を運んでいただき、今年の東葛祭も大成功をおさめました。後夜祭ではグループに分かれ、レクリエーションを行いました。有志として3年生がライブを行い、大盛り上がりとなりました。東葛祭を通して学年を越えた交流ができました。

第23回東葛祭実行委員長
廣内真菜美



腸蠕動を電車の揺れに例えて



食堂タコライス売り場



野田一民展

第23回 体育祭

その脂肪燃やせないと思って諦めてない？『諦めない、燃やすの』

6月30日に流山キッコーマンアリーナにて、体育祭が行われました。

今年 は1年生の交流研修で高評価であった玉入れを導入することになりました。それに加えて、男女混合バレー、借り物競走を行いました。今年は男女混合バレーの試合時間を増やすために、男子バレーを種目から抜きましたが、競技の流れがスムーズに行われたことで、時間が余ったため、急遽男子バレーを行うことになりました。白熱する競技に各クラスが丸となり応援を行う姿が見られま

した。また、他学年と一緒に写真を撮ったりなど交流も行われており、当日のアリーナ会場は声援で溢れかえていました。

また、体育祭を盛り上げようと、ドラゴンボールやアラレちゃんなどのキャラクターをはじめ、お揃いのTシャツ、ツナギ、一人一人個性豊かな仮装もあり体育祭がより一層賑やかになりました。

2年生はスティックバルーンを用いた応援で一致団結し体育祭をさらに盛り上げました。

3年生は最後の体育祭であり、応援、競技共にクラス一丸となり

圧倒的な強さで優勝しました！

実習期間中の開催のため、安全面に配慮したルールを考えて行ったことで、今年も大きなケガや熱中症者を出すことなく、楽しく体育祭を終えることができました。

実行委員長 喜多村美来



東葛学食

2017年10月より「東葛学食」が始まりました。学校の近隣にコンビニも食堂も数少ないことから、学生自治会より「食べ物の自動販売機を入れてほしい」との声が上がったのと、教員から学生達の食生活への不安が高まって来た事もあり「きちんと食事をとる大切さを伝えたい」との思いから始まりました。しかし職員だけでは続けるのは無理ということと、地域の方々との交流をしていきたい思いもあり、地域の方々にお手伝いをお願いすることになりました。

第1回目のメニューは「豚汁・

炊き込みご飯・漬け物」前日から地域の方々が仕込みに入り、当日も朝から調理開始。お昼前には学校中に美味しそうな香りが漂います。

2限目終了と同時に調理室前に行列ができました。多めに作っていただいたのでおかわりもたっぷりあり、男子学生は2度3度とおかわりをしていました。

2回目はカレーライス・3回目は牛丼でした。毎回「次のメニューは何？」「なにがいい？」と地域の皆さんとの交流もしながら完食です。

月1回ですがみんなで食べる食事の楽しい時間をこれからも大切にしていきたいです。



学生と 共に歩んだ一年

1年生

23期生

担任

戸澤 亜矢

佐藤千賀子



ナーシングセレモニー

私たちは、2017年4月に東葛看護専門学校に入学しました。入学したばかりでクラスメイトの名前と顔が一致しないまま、初めてのグループワーク「交流研修」がありました。「地域の人々の生の声から、人生・健康・医療について知り、看護について考えていこう」というテーマで、「地域に暮らす人の具体的な

生の声を捉え、聴いたこと見たこと思ったことをありのままにレポートを作成する」という内容でした。最初「交流研修っていったい何だろう?」「ありのままって何だろう?」「レポートってどうやって書けばいいの?」など全てが分からないことだらけで不安のままスタートしました。交流研修では、戦争を体験さ

れた方や在宅療養されている方など6人の地域の方々からお話を伺いました。グループメンバーで読み合わせをし、同じ話を聞いても人それぞれ捉え方が違うことに気づきました。これまで聞いたことや見たことの事実をありのままに書いたことがない私たちは、始めは聞いたことを要約した方が分かりやすい



4月交流研修



体育祭バレー

と思っていました。しかし、要約すると人によって解釈が変わってしまい、ありのままの事実ではなくなることが分かりました。初めてのグループワークで仲間と協力し、調べたり情報を共有しながら1つのレポートを作りあげることができ、達成感を感じ自信に繋がりました。交流研修をとおり、私たちは「ありのままの事実を捉える難しさ」と大切さ「仲間と協力することの楽しさ・達成感」を学びました。

10月に基礎看護学1-2実習で5日間の実習に臨みました。

70代の心不全を患っているHさんは、年金や保険料が未払いだったため年金を受給できず、介護サービスを受けることが出来ていませんでした。全身の浮腫みで体重が20kgも増え、胸水がたまり呼吸が苦しくても「まだ大丈夫だ」と自分に言い聞かせ2ヵ月前から、我慢していたそうです。自宅での移動は、やっとの思いで布団から起き上がり床を這って、1時間もかけて椅子に座するという状態でした。話を聞いていく中で、なぜここまで受診できなかったのかという疑問がHさんの生活背景と繋がっていきました。Hさんは、くも膜下出血で入院した時に100万円という高額な医療費をやっとの思いで返済した経験がありました。そのため「お金がかかるのではないか」という経済的な不安を抱えていました。退院後の生活を考えれば介護

サービスは必要であり、今までの保険料未納分を含めた月々の支払いが必要になります。年金収入がないHさんにとって、その支払いは負担であり、申請をしないと判断したそうです。「息子に負担をかけてしまうのなら、何も望まないしこれ以上迷惑を掛けたくない」という思いがあるのだと知りました。Hさんの生活史を知り「お金がない」ということは必要な治療を受けることができず、命に関わる状態になるまで受診は後回しになってしまうと思いました。

基礎看護学1-2実習をとおり、貧困と健康が密接に関係し、経済的に困窮している人は生活することに精一杯で、医療にかかれぬ現状があることを知りました。看護総論の授業で、貧困と医療について学んでいましたが、このような実態が身近にあるという認識がありませんでした。Hさんのように本当は医療を必要としている人が、他

にもたくさんいるのではないかと思います。すべての人の健康を護る為には、誰でも平等に受けることができる医療制度が必要です。そして、人々の暮らしの中で医療がもっと身近な存在であってほしいと思い、貧困と医療の現状を深く学ぶ必要があると感じました。

私たちは、看護とは知識や技術を身につけて「手伝う・してあげる」ことだと思っていましたが、授業や実習で患者さんと私たちは対等であると学びました。患者さんがどのような思いを持ち、どのような時代を生き労働をしてきたのかを知り、患者さんの願いや要求を共に諦めず追求していく看護師を目指します。

これからも患者さんから学ぶことを大切に、クラス全員で学び続けていきます。



歌で産休に入る佐藤先生へエール



ベッドメイキング



車いすウォッチング



手洗い実験

学生と 共に歩んだ一年

2年生

22期生

担任

高橋里美

高田澄子

生田知歩



体育祭

2年生の学習は生命活動から始まりました。いのちの発生・進化を調べ、わたしたち60兆個の細胞がどのようなにはたらき、恒常性を保っているのか8つの系(人間誕生・呼吸器・循環器・骨筋・免疫・消化器・脳神経・内分泌)に分かれ学習しました。

東葛祭で骨筋グループは、人間が健康に生きていくためには、自らのからだをしっかり動かし、荷重をかけることで骨密度が増え、筋肉の細胞一つ一つが大きく強くなると学びました。進化の中で人間は労働や社会活動を通して手を使い道具をつくることができるようになり、脳を発達させていきました。進化を学ぶことによってサルと人間が違々と分かり、考えることができ

る私たちだからこそ未来を作り上げる力がある。これからどう生きていくべきか責任を持って考えていく必要があると学びました。

生命活動での学びを通して、5月下旬から3週間成人1実習に臨みました。ある学生は左被殻出血で倒れ、リハビリ目的で入院された右麻痺の40代女性のA氏を受け持ちました。同じ右麻痺で、一緒に闘病している患者さんが発する「どうせ治らない」という言葉を聞くうちに「このままりハビリをしても治らないのではないか」という迷いがある様に見えました。看護師さんに相談すると、出血病巣が違々と伝えてくれ、A氏の迷いが軽減されました。正確な病

態の理解がないと、リハビリの意味を説明する力にならないと学びました。また、学生は脳の可塑性をA氏に説明し、リハビリをすればよくなると励まし、冷たい水と温かいお湯で毎日手浴を行いました。手が軽くなったことでリハビリに前向きに取り組めるようになり、左手で書字の練習に励む姿が見られました。後日A氏からの手紙を受け取り、人間の回復する力を実感しました。

夏休み後は約4ヶ月かけて外科・精神・小児・母性の各論実習に臨みました。

外科実習で、ある学生は60歳代後半の男性B氏を受け持ちました。B氏は糖尿病、末期腎不全、うっ血性心不全、心タンポナー

デなど生命に関わる疾患があり、透析が導入され、冠動脈バイパス術もしている方でした。腎臓の働きが低下したことで、続発性副甲状腺機能亢進症にもなり、4つの副甲状腺摘出と腹壁皮下移植という手術を受けました。「何回も経験したから不安はないよ」と仰っていましたが、手術当日「手術は何回やっても緊張するね」と話され、経験しているからこそ手術の恐怖や術後の大変さがわかると感じました。侵襲の大きい手術を受けたB氏が元気に回復していく姿を見て、改めて人間の回復力の凄さを学びました。

精神実習では、統合失調症を発症して25年、8回の入退院をくり返しているC氏を受け持ちました。水中毒があり、体重の増減が激しく、低ナトリウム血症がみられこともある中、一人暮らしを目標に毎日外泊の練習を行っていました。私たちは、体重チェック表を作成し、C氏自身に記入してもらい、体重の増加が身体に与える影響を理解できる応援をしました。なにかに集中していると水を飲まないことから、デイケアに毎日通う事や、レクリエーションを行いました。C氏の健康さにはたらしかけられることで、自分のできることが増えました。患者さんの



生命活動 稲刈り

願いをもとに、継続して働きかけていく大切さを学びました。

小児実習では川崎病の4歳D君を受け持ちました。この病気は数日で冠動脈瘤ができる原因不明の全身の毛細血管の炎症です。D君は黄疸やビリルビン尿という肝炎症状も出るほど強い炎症がありました。初めは具合が悪く起きることもままならない様子でした。グロブリン治療をしましたが、再燃し、再度グロブリン投与すると少しずつ回復し、大好きなアニメゲームで楽しそうに遊ぶ、本来の活発な姿を見ることが出来ました。刻一刻と変化する小児の病状を正確に把握していく大切さやその難しさを実感しました。退院日には心臓や肺、腸など身体の仕組みについてパズルで説明し、薬を飲むのが嫌いなD君に、冠動脈瘤を予防する薬の大切さを説明しました。その実践から、年齢にあった成長と発達の応援をしていく大切さを学ぶことが出来ました。

母性実習では妊娠38週のJ氏を受け持ちました。J氏は子宮



東葛学食のひとコマ



生命活動 骨筋グループ



学童で健康学習会



母性演習

口が全開大の状態ですら分娩台へ上がり、声を荒げながらいきみ、生まれた赤ちゃんは、想像と違い紫色をしていました。それからすぐに啼泣し、全身をピンク色にさせるほど酸素を取り込んでいきました。酸素供給源であった胎盤・臍帯と決別し、啼泣により酸素を取り込み、娩出を境に発揮される新生児の胎外環境への適応能力に、ただ驚きました。J氏は安心して満ちた表情で産まれたわが子に真っ直ぐ手を伸ばしていました。苦しい分娩を乗り越えたとは思えない穏やかな表情をし、看護師が赤ちゃんの全身観察する様子を熱心に見るJ氏から、愛着や母性といった目に見えない想いを間近で感じる実習となりました。助産院や保育園・子ども食堂など地域での実習を通して、退院後の母子や家族がどのような思いを持って地域で暮らしているかを知り、母親が安心して子育てでき、子どもたちが健やかに成長できる世の中になるために、看護師として何が出来るかを考えた実習となりました。また、貧困は社会全体で考えていく問題と学びました。

学生と 3年生 共に歩んだ一年

21期生

担任

菊池静華

江島典子

福井慶子



体育祭

沖縄県研修旅行

私たちは沖縄県に行き、沖縄戦の実態、戦時中の医療、基地問題を学んできました。そのなかで元白梅学徒隊の中山さんのお話を聞きました。当時学生だった中山さんは、簡単な看護教育を受けた後軍の命令により手術壕で働いたそうです。そこでは蛆が湧いて傷が真っ黒になって壊疽をおこしている人の手足の切断や弾丸の摘出などの凄惨な手術が行われていました。銃弾が飛び交うなか死の危険にさらされながら、切断された手足の処理や水汲みなどに従事しました。中山さんの「あなたたちにあのようなことはさせたくない」「平和でなければ看護はできない。平和な社会をつくる努力をして欲しい」というお話を聞き、

私たちは「今の看護は平和だからできるものなのだ」と改めて思いました。

2日目には集団自決のあったチビチリガマを見学しました。集団自決に至ったのは、「米軍に捕まったら女は辱めを受け殺される。男は引き裂かれ殺される」という教育を受けたためでした。「米軍に殺されるくらいなら」と自ら死を頼み込む住民もいたそうです。集団自決は住民が自ら命を絶ったのではなく、悲惨な状況下で生まれた虐殺だったと学びました。

辺野古では基地建設反対の運動を続けている人達からお話を聞きました。行く前は「座り込みをしても何も変わっていないのではないのか、このまま続ける意味はあるのか」と疑問に思って

いました。しかし、20年もの間闘い続けたからこそ計画を引き延ばせている事実を知りました。「沖縄にある基地から戦争に出ていく米軍を止めることはできない、止められない私たちも加害者だ」という言葉を聞き、諦めずに闘い続けることが大切だと学びました。研修旅行後にも米軍のヘリが東村高江の民間地に墜落したニュースを聞き、米軍



沖縄高江座り込みテントにて



総合実習

の事故・事件は現在も続いており、基地がある限り沖縄の住民の人権は護られないと痛感しました。研修旅行を通し、知らないということは間接的に加害に繋がってしまうことを学びました。

卒業研究ゼミナール

総合実習では受け持った患者さんの事実から出発し、研究を進めていきました。ある患者さんは、パーキンソン病と廃用症候群で週1回の訪問看護と週3回のデイケアのサービスを利用していましたが、褥瘡ができ、入退院を繰り返していました。褥瘡を再発しないよう自宅での生活を続けるためには毎日の訪問看護が必要でしたが、経済的な問題でサービスは受けられていませんでした。その背景には何があるのか議論し、超高齢社会の対策として現在国が進める地域包括ケアシステムについてグループで疑問を持ち、本当に十分な制度なのか調べていきました。現在の地域包括ケアは国の医療費削減という狙いのもと、「川上から川下へ」というスローガンで、自助・互助・共助・公助の役割分担と順番が強調され、国が保障しなければならない責

任を家族や個人に押しつけていることがわかりました。現在日本は高齢化とともに医療費の増大が問題となっています。しかし世界との比較では、医療費はとても低く自己負担を強いている国であるということを知りました。政府は健診をすすめています。がん検診は約25%しか受けておらず、予防医療が進んでいない現状が医療費の高騰にも繋がっていると学びました。日本は先進国であっても、実際にはお金のあるなしで医療にかかりたくてもかかれない人がいるという現状を知りました。キューバは日本と比べ1割の所得しかなく、経済的に裕福な国とはいえません。しかし、ファミリードクターという地域住民の健康を

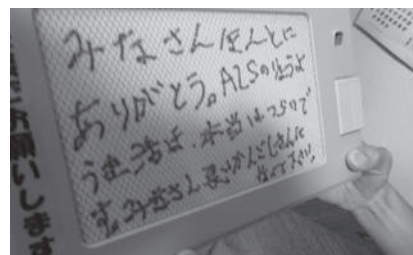
支える仕組みも整っており、医療費と教育費も無料です。日本もかつては岩手県の旧沢内村の実践が全国に広がり、老人医療費無料に繋がりました。戦後、生活保護受給者の生活が最低限度以下だったことから、朝日訴訟をきっかけに全国に運動が広がり草の根の闘いで勝ち取った権利もあると知り、命を護ることを諦めず、一人一人が声をあげ社会を変えていく必要があると学びました。3年間を通して、私たちは憲法第25条にある「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」が保障されるためにも社会の一員として責任を持ち、人権を護る医療者になりたいと思います。



老年実習



Aさんと作ったクレマチス



在宅実習Aさんから手紙

夏季公開講座の開催

副校長 山田かおる

東葛看護学校は、看護学生の臨地実習が豊かな学びの場となるように、年8回の会議と1回の研修会を実施しています。学生の臨床実習に係る臨床指導者と教員と一緒に、教育や医療の学習や事例検討をしています。

今年度の研修会では、元小学校教員の霜村三二先生の講演を行いました。今、学校で何が起きているのか、人が育つとは、三二先生の講演内容を要約してお伝えします。

テーマ

愛を語り、安心を結ぶ『らぶれたあ』
～学校で起きていること・人が育つということ～

講師

元埼玉県公立小学校教員・
都留文科大学非常勤講師
霜村三二先生

学校は今

今、どうなっているのか。今「学校スタンダード」というものが広がっています。なぜかというと、社会状況がさまざまに困難になっていて、子どもたちの教育が難しくなっているからです。学校に対する保護者の要求も強くなっています。それに対応するために、学校である種のマニュアルが必要になっています。また、ベテランの教師たちがどんどん退職して、ベテランが経験的にやってきた事柄を若い教師たちにうまく継承でき

ていないということもあります。だからマニュアルを作って、そのマニュアルどおり対応するというわけです。それを学校現場では「スタンダード」と呼んでいます。「教師スタンダード」とか「児童スタンダード」、中には「保護者スタンダード」を掲げている学校もあります。しかも、その掲げ方が年々厳しくなっているのです。

小学校の教師になったHさんからメールが来ました。「子どもたちとも楽しんでいるし、大学で学んだことをやれる。嫌だと

思うこと。学校が地獄。子どもたちは囚人のよう。時間に厳しくて、休み時間がとれない。給食は完食させなければならない。残飯があるクラスは統計が出され、職員室に貼り出される。『もぐもぐタイム』をつくり、無言で食べさせる。それから毎日必ず宿題が出る。学校じゃなくて刑務所だなと思う事がたくさんある」という内容でした。希望に燃えて教師になった途端、その希望を奪うような現実が学校の中にあるのです。この学校には「時間を守らせる」とか「給食のときに



絵で説明

はもぐもぐタイム」など、計35のスタンダードがあって、それを守るように厳しく要求されているそうです。

希望がどこにあるの？

子どもたちが教えてくれたこと。学校の主人公は、だれが考えても子どものはずです。しかし、ともすると教師が主人公になり、さらにその後ろにいる人たちが主人公になってしまう。その結果、教育が教育でなくなって、ある意味、調教というようなことが広がっているのではないのでしょうか。子どもが教えてくれたことを1つの例で紹介します。

学校現場に立っていて、ぼくが迷ったり、子どもがあれたときには自分に問い直してきた言葉があります。それは「学校は何をすることだろう？」という言葉です。何をどのように学ぶのかということです。

5年生のクラスを担当したとき、授業参観で「はじめて小鳥が飛んだとき」(原田直友)という詩を読みあおうと思いました。小鳥がはじめて飛んだ、小鳥を飛ばせる力はなんだったのだという、ということをつかむのがテーマです。この詩の世界を

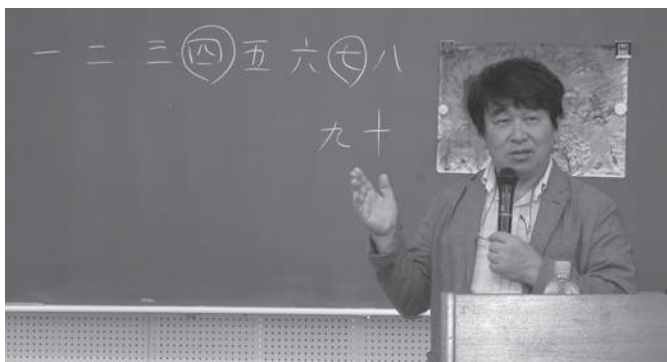
子どもだけでなく、保護者とも共有したいと思いました。学校は学ぶところと言ったとき、それは子どもだけが学ぶところであり、保護者が学ぶところでもあり、また教師にとっても学ぶところではあります。この授業の後日談です。Tくんという男の子は一筋縄ではいかない5年生でした。みんながまとまろうとするとき、チャチャを入れたりするので、周りの子たちも「困ったやつ」という目で見ていました。Tくんは自己防衛のために、わざと他の子と違うことをやったり、他の子を傷つけたりするのではないかと。そう思い、クラスの子もたちのTくんへの関わりを変えることができないかと考えました。リコーダーのピアノの伴奏をT君にやらせようと考えました。「いいよ」と引き受けたのですが、ちっとも真剣さが見られません。そこでクラス一番ピアノがうまいAさんをコーチにつけました。地獄の猛特訓が始まりました。子どもたちの応援で、T君は一步を踏み出しました。T君の本番の演奏はこれまでにない最高のものでした。家でも何度も練習したそうです。小鳥がはじめて飛んだように、

自分の力を出し切ってひいたのです。これは周りの子どもたちの応援なしではできませんでした。Tくんは明らかに変わりました。人とのかかわり方が変わりました。ぼくはどうしても、その子自身を変えたいと思って働きかけるんだけど、Tくんが変わったのは、周りの子どもたちの関わり方が変わったからです。人というのは、人の関わりの中で変わっていくということを改めて実感させられた出来事でした。

大切にしたいこと

最後に、人に何かを伝えるときに大切にしたいことがあります。教育現場だけでなく、政治家の発言などでも、だれも責任をもたない中で言葉だけが漂っているような場面がよくあります。言葉を手応えあるものにするには、言葉の響きのやりとりを共有することだと思います。コミュニケーションをとるときには、漢語と大和言葉ということもちょっと意識において語りかけてみてほしいと思います。

「医療と福祉」2017年9月号より



大和ことば



霜村さん

千葉県看護教員養成講習会の看護教育実習を受け入れて

10月16日～11月10日、千葉県看護教員養成講習会 看護教育実習で2名の先生が本校に来てくださいました。授業、臨地実習指導、会議参加をとおして、看護教育の実践と学校運営について学んでいただきました。教育実習を行った2名の先生のご紹介いたします。

伊藤知恵さん

学生が学生として学ぶ権利を大切にされていて、教員が決めるのではなく、学生が話し合って決めることを大



伊藤知恵先生と2年生の小児実習グループ学生

切にしているということを感じました。教育宣言にあるように、しめつけや抑圧で育つ人間性はないということ、学生は発展途上にある人であり、教育基本法に基づいてどの人も平等に学ぶ権利が保障され、人間性豊かな看護につながっていたということを実感しました。学生とともに学びあうという姿勢があり、学生がのびのびとしていて学校全体があたたかいと感じました。

教育実習で学ばせていただいた大切なこと、今後に生かしていきたいと思います。

花島雅子さん

3年間、学生の主体性を育て

る関わりをされ、学校全体、教職員全員が、学生の学びを応援していました。3年次の総合実習で、学生が主体的に実習に取り組む姿から、3年間積み重ねてきた先生がたの関わりによる成長した姿であると実感しました。

教育実習の3週間、先生方の教え、その教えでのびのびと学んでいる学生の姿を見て、教員の素晴らしさ、やりがいも感じることができた。私も、今回の学びを宝物にして「教員」として学生と共に学べるよう、経験を積んでいきたです。



花島雅子先生と3年生の総合実習グループ学生

ようこそ先輩

受験したあの日から、本校での学びがスタートしました。面接待機中、緊張している受験生に、在校生が音楽をかけ、「大丈夫だよ」とリラックスできるようにしてくれた声掛け…。胸いっぱい溢れる感動とここで学びたいと決意した瞬間でした。本校で学んで良かったと思う事は何よりもこの“温かい心”です。この学びが今でも人を看護するだけでなく、後輩を育成したり、人間関係を構築する上でもとても役に立っています。

入学後、様々な学習が進み、やがて実習が始まりました。カルテや人からの情報だけに頼らず、患者様の生きてきた背景や願いを自分の目で見たり、直接聞いたりすることで、全人的にありのままに捉える看護の姿勢は、その人の人生観にも寄り添うことができる看護の第一歩でした。そして何よりも病態を理解できなければ看護は成り立たないことを痛感し、知識と技術の向上を目標により勉学に励むことができました。

本校を卒業後、進学し助産師になりました。日々業務に追われる中で、学生時代に培った経験が、一人一人と向き合い応援していくことに繋がっています。

学び＝宝物です。その財産を生かして、在校生の皆さんと東葛看護学校の“温かい心”を持った看護を共にしていける日を楽しみにしています。



2科12期生 伊東智子

人前で話すことが苦手で、自分の意見をなかなか言えず、グループワークやレポート発表には大変苦労をした学生でした。愛溢れる先生達の中で、マイペースな性格を理解していただき、きめ細かい指導をして頂いたことは私の看護師人生の上で、とっても大切なものとなっています。

東葛看護学校を卒業してもうすぐ10年になろうとしています。現在私は、東葛病院の外科と泌尿器科混合病棟で勤務しています。病棟では、チームリーダーや褥瘡対策委員として日々頑張っています。最近は東葛看護学校へ講義に行くこともあります。人前で話すことが苦手だった私が、教壇に立ち学生指導や職場でリーダーをするなんて、想像もしていなかった不思議な感じです。日々の業務で終わらず、次の世代を担う方への教育にも携わり、新たな自分の勉強になっています。

姉も卒業生であり、姉の夫も東葛看護学校の卒業生です。家族に卒業生が増え、母校の思い出話に花を咲かせ、時には看護について熱く語ったり、日々楽しく過ごしています。東葛看護学校は愛を育てる学校とよく言っていますが、本当にそうだと思います。学生の皆さん、今学んでいることは将来、大切な宝物になると信じて頑張ってください。



1科12期生 浅川直美

20期自治会活動紹介

私達東葛看護専門学校は、教育宣言にもあるように学生が「学び」と学校生活の主人公となっており、学生と教職員ともに日々学んでいます。

3年間の学びの3分の1を占める臨床実習では、患者さんの生きてきた生活史を知り、願いに沿えるよう看護実践を行っています。実習を行なうと自分の未熟さとも向き合うことができ、そのたびに日々の勉強の大切さを感じます。私たちは実習と学習を重ね看護師になるため日々精進しています。

自治会は、学生ひとりひとりが看護師を目指し、主体的な学びをつくることができる「学生が主人公の学校」を目指す活動をしていきたいと思っています。学生の要求を真摯に受けとめ、学校全体で解決に向かっていきます。

その中で、学生の中に授業に集中して取り組めていない学生がいるという現状を知り、アルバイトの労働実態に焦点を当て「アルバイト実態調査」を行いました。その結果では、奨学金を受けている人が84%もいるのに、アルバイトをしている人は半数以上おり、収入の使い道は生活費、学費、交通費と学生生活にアルバイトが欠かせないことを知りました。また、アルバイトが学校生活に影響があるかという問いに対し「はい」と答えた人が40%おり、実際にテスト勉強が疎かになったり、授業に集中できない人もいるなど、本校の学生の中に、アルバイトで学業に専念できない実態がありました。

今の社会ではどれだけ働いても生活困窮に陥ってしまうワーキングプアが全体で24%を占め、49万人もいることを知り

ました。また、正規雇用者は年々減少し、非正規雇用者が全体の4割を占めており、長時間・過密労働であることもわかりました。

患者さんを含めた私たちが生きている社会に目を向けると、見えない格差や貧困が拡大している事実があると気が付き始めたところです。学生アルバイトも同様に労働時間も守られず、正規雇用者と同等の作業密度・責任を負いながら学ぶ実態があることを知りました。

こうした貧困の実態や働き方にも目を向け、自分たちが何をすべきなのかを考えられるように、貪欲に学んでいき、学校全体への発信、さらには学校外での活動に積極的に参加していけるような自治会にしていきたいです。

自治会役員



平和ゼミナール

原水爆禁止2017世界大会長崎



大浦天主堂



原爆資料館

核兵器禁止条約が採択された2017年8月7日～9日に、長崎で行われた原水爆禁止世界大会に6名の学生が参加しました。被爆者の方たちは「核兵器禁止条約が採択され、本当によかった。」と喜ぶ一方で、「被爆国である日本がなぜ核兵器禁止条約に批准しないのか。」と国連での話し合いの場に参加さえしなかった日本政府に対する怒りを訴えておられました。また、「核兵器廃絶への大きな一歩であり、これからも核兵器廃絶への運動を行っていきたい。」とも話されていました。開会式では平和を願う活気、熱気を強く感じました。6000人を超える方々が長崎に集まっており、日本国内だけでなく世界中の多くの人たちが本当に核兵器廃絶と平和を願っているのだと感じました。たくさんの核兵器廃絶への熱い思いを聞くことができ、日本でも声を上げている方々がどれだけたくさんいるの

かを実感することができました。

2日目は「青年のひろば～被爆者訪問・学習と交流～」に3名の学生、教員1名が参加しました。また「佐世保基地調査行動」に1名の学生、「被ばく遺構、碑めぐり」に2名の学生が参加しました。「青年のひろば」では、3名の被爆者の方から話を聞く予定でしたが、2名の方が体調を崩し、お話を伺うことが出来なくなってしまいま

した。被爆者の平均年齢は80歳を超え、話せる方が少なくなっていることと、私たち世代が被爆者の方の生の声を聞ける最後の世代なのだと改めて実感しました。被爆者の方は核兵器禁止条約が採択されたことに「世界をまとめるのは難しい。でも被爆した国、日本が世界をまとめていかないといけないと思う。被爆体験の話をするのが最後になるかもしれない。話す機会を作ってくれて感謝す



長崎空港にて

る。話したいこと、伝えたいことを真剣に聞いてくれて感謝する。」と話されていました。佐世保基地調査行動では、V22オスプレイの配備が進められ、今まで使わなかったヘリポートが使われる予定であること、旧日本海軍が使われていた弾薬庫が今も使われており、弾薬庫からわずか70mしか離れていない場所に民家があることを知りました。「平和の訴え」は日本だけでなく世界に発信していくこと、また住民の理解が得られるように国からも明確な説明が必要だと感じました。「碑めぐり」に参加した学生は在日朝鮮人慰霊碑について疑問を持ちました。在日朝鮮人慰霊碑は日本人の大きな慰霊碑から離れた場所にこじんまりと建っている

す。なぜ朝鮮人が強制的に連れてこられた場所で、こんな悲惨なことにあって亡くならなければいけないのか、そしてなぜ在日朝鮮人慰霊碑だけが隅にあるのかと感じました。また分科会が終わった帰りに、一人で署名活動をされている高齢の女性に出会いました。私たちが署名をし、原水爆禁止世界大会に参加していることを伝え、その女性は「若い人たちが参加してくれて嬉しい。」とすごく喜んでおられました。その後、少し涙ぐんだ顔で「これからは戦争や原爆について若い世代の人た

ちが次の世代に伝えていってほしい。」と話してくださいました。

3日目は閉会式が行われ、原爆投下の11:02に黙祷が行われました。被爆者の思いを受け止めるとともに、今後同じ事が繰り返されることのないように、核兵器廃絶と平和への願いのバトンを受け継いでいくと決意しました。今回の長崎での3日間で見えたこと、聞いたこと、そして会った方々から学んだ原爆、戦争の悲惨さを忘れないよう周囲の人たちや次の世代へと伝えていこうと思います。



灯ろう流し



佐世保港



おそろいTシャツで

編集後記

2017年度も様々な教育実践の中で、そのたびごとに成長していく学生の姿に出会い、感動をたくさんもらいました。臨床実習やゼミを通してのグループワーク、東葛祭や体育祭での学年を超えたかわりと活動、東葛学食を支えていただいている地域の方々との交流など、「暖かいまなざしと励

ましをもらいながら学び、実践の手ごたえが成長の瞬間(芽)を育てている。」こと。まさに、霜村三二先生のご講演のなかでのべられた『人というのは人との関わりの中で変わっていく』ことを実感した一年間でした。これからも「豊かな学びの場」であり続けるために奮闘したいと思います。

編集委員長 窪倉みさ江



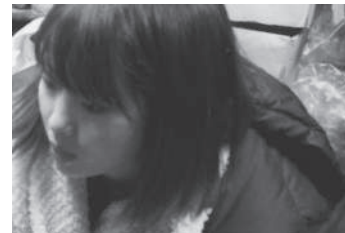
原水禁長崎 報告



学^{キラリ}ぶ青春



'15.4~'18.2
小林功
モノクロ写真館



笑いこぼる故三上満さん



勤医会東葛看護専門学校

編集・発行 勤医会東葛看護専門学校
〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409 TEL.04-7158-9955 FAX.04-7159-7055
発行責任者 校長 窪倉 みさ江